

# 成果報告書

## I. 研究概要

氏名	永野マドセン泰子
所属	スウェーデン国立イエーテボリ大学日本語学科
招聘回（招聘期間）	2011・05・03～2011・09・30
招聘研究テーマ	日本語のアクセントとイントネーション
研究目的	日本語の二大方言のひとつでありながら、本土方言と比べると著しく研究の遅れている琉球方言を対象に、アクセントとイントネーションの研究をすすめる。琉球方言の標準語ともいえる首里方言（北琉球・沖縄南部方言）、日本語のなかでも最も複雑なアクセント体系を持つ今帰仁方言（北琉球・沖縄北部方言）、そして無アクセントである宮古・伊良部島方言（南琉球・宮古方言）の3方言を対象とする。この三つの方言はそれぞれ「下げ核をもつ」「昇り核をもつ」「核をもたない」という異なるアクセントのタイプの方言であることから、日本語のアクセントの相互関係、そのイントネーションなど、新しい知見が期待できる。また、琉球方言に残る「係り結び」構文のイントネーションを分析する事で、「係り結び」に対する新しい解釈を提出する。成果を海外にも発信し、近年海外で日本語を学ぶ学生の間で増加している日本語の方言や琉球語への興味に対応するという教育上の効果をも目標とする。

### 研究概要：

主な活動は以下の5点に分けられる。(1) 国語研の図書館で先行文献を集め論点をしぼる（海外では大変難しい）、(2) 研究を発表することで、他の研究者と意見の交換を行う、(3) 調査票を作成する、(4) 録音する、(5) 論文を執筆する。

「調査票」については、首里方言、今帰仁方言、そして宮古・伊良部島方言を対象にアクセントとイントネーションの調査項目を作成。それに基づいて、録音、分析をし論文を執筆した。また国内外の研究会や学会で成果を発表し、成果を広めるとともに、研究者間の意見の交換を行った。調査項目の主なものは、アクセントについては、下降型、平板型、上昇型などについて音声学の実態を明らかにする。「おおきい家」などのように二つの語を組み合わせた場合の変化を見る。イントネーションは「構文構造」「フォーカス（係り結び）」「モダリティ」「感情表現」の4項目との関連について調べる。

研究の発表と研究者間の交流は以下の3つを通じて行った。(1) 国立国語研究所・東京（6月9日）

「首里方言にみる法接尾辞と疑問文イントネーション」、(2) 音声研究所・奈良（7月30日）

「首里方言にみる文法とイントネーション」、(3) 第17回音声科学国際会議・香港（8月18日）

Mood suffix and question intonation in Ryukyuan.

### 現在までに得られた主な研究結果：

(1) 「首里方言にみる法接尾辞とイントネーション」首里方言には日本語の本土方言にはない「法接尾辞」

がありこれにより「平叙文」「疑問文」などが指定される。イントネーションはアクセント型をそのままとり、東京方言や大阪方言のように疑問文は上昇調、平叙文は下降調などの区別がない。(論文1参照)

(2)「首里方言のイントネーション」琉球方言の標準語である首里方言について、「構文構造」「フォーカス(係り結び)」「モダリティ(文のタイプ)」と多角的に分析した。これにより本土方言との差異が明らかになった。(論文2参照)

(3)「南琉球・宮古伊良部島にみる無アクセント方言のイントネーション」

主な成果：宮古・伊良部島にみる無アクセント方言は「へ」の字型をした句(フレーズ)成分を基調とするイントネーション構造を持つ。フレーズ成分におけるピッチの高低とポーズの挿入により、構文構造が区別されている。下げ核の首里方言には必ず冒頭にピッチの上昇があるが、昇り核の今帰仁方言にはそれがない。無アクセント方言(宮古伊良部島)には一貫して冒頭にピッチの上昇があることから、この方言が首里のような下げ核方言から派生、崩壊したものであることが推測される。反対に無アクセントから下げ核が派生するとは考えにくい(論拠はここでは省略する)。

(4)「今帰仁方言のアクセント」(今後執筆)

(5)「日本語の方言にみるピッチアクセントタイポロジー」(今後執筆)

(6)「イントネーションから分析する係り結び構文の特徴—琉球方言のデータから」(今後執筆)

成果まとめ：

- 琉球方言の標準語といえる首里方言のイントネーションをはじめて明らかにした。
- 日本語の3大アクセントタイプについて相互の関係を提案できるデータが得られた。
- 無アクセント方言のイントネーションを多角的に分析した。
- 日本語のアクセントやイントネーションの研究に新しい知見を加えた。またそれを海外にも紹介した。今後も今回の研究成果を順次論文にまとめ発表していく。

展望：

海外では近年、日本語の方言に対する興味が増しており、私の指導する卒業論文でも皆口を揃えて「テーマは方言で」と言う。背景には日本に留学する事が普通になり、学生が留学先の方言に触れる機会が増えたことが考えられる。日本の方言研究は高い水準を誇り、また膨大な研究成果が蓄積されている。しかし、これらが海外で紹介されることは稀で、その研究成果について英語で読めるチャンスはほとんどない。そのような現状を考え、微力ではあるが、できるだけ英語で研究成果を発表し、同時に日本に蓄積された研究成果をも紹介ながら、教育への貢献を心がけてゆきたい。特に琉球方言については従来より海外で人気のある分野であることから、今後は研究会をヨーロッパで行うなど、海外の学生にとって身近なものにしてゆきたい。来年は「スウェーデン国内音声学会」が私の勤務するイエーテボリ大学で開催されるので、それに合わせて何人かの先生に国語研から来ていただけるよう働きかけている。順調にゆけば、3年後をあたりを目途に日本の方言や琉球方言についての国際シンポジウムをイエーテボリ大学で開催する可能性を考えている。

## 成果報告書

### II. 研究成果論文

以下の2論文については、添付ファイルで送ります。

(1) Mood suffix and question intonation in Ryukyuan. In Proceedings of the 17<sup>th</sup> International Conference of Phonetic Sciences, Hong Kong. (4 pages) 2011

(2) Intonation in Ryukyuan – with reference to modality, syntax, and focus . (*Language Documentation and Description*\*, SOAS, London University. に受理済み。25 ページ:単著。2011年末か2012年はじめに刊行予定)。

# 成果報告書

## I. 研究概要 (サンプル)

氏名	博報 教子
所属 (役職)	ブラジル・サンパウロ大学・日本語学科 (准教授)
招聘回 (招聘期間)	第 2 回 (2007 年 10 月 1 日～2008 年 3 月 31 日)
招聘研究タイトル	ブラジルにおける・・・
研究目的	現在、ブラジルでは・・・
研究概要：	この研究は・・・
展望：	将来的には・・・